

学生年代への銭湯 PR を目的とした広報活動

団体名●石川県公衆浴場業生活衛生同業組合／代表者名●高島 悠（進路支援課）

はじめに(背景・目的・目標)

地域住民にとって身近な存在である町の銭湯。今年度も廃業や休業が相次ぎ、金沢市では2026年3月現在で13店舗という状況になった。

今年度は、昨年度に引き続き「パパママ銭湯」を金沢市内で実施し、新規取り組みとして星短生がボディウォッシュタオルの商品を開発し、子供向けの記念品としてスタンプラリーに繋げた。そして銭湯を知り、利用を促す目的の広報誌となる「かなざわおふる旅新聞 第4弾」も発刊した。部数は2,000部で、今年は共創インターンシップに挑戦した神崎ゼミナールの3年次学生が製作に携わった。

活動内容①「パパママ銭湯」

金沢市内の公衆浴場で「パパママ銭湯」を今年も実施。金沢市と銭湯組合が協同で実施しているこの企画。日常の育児に奮闘しているパパやママのために、お風呂にゆっくり浸かって一息つける、そんな時間を用意した。公衆浴場で2時間程度、子連れ歓迎タイムを設定。金沢星稜大学の人間科学部こども学科に在籍する保育士志望の学生やサポートスタッフを配置。お子様の着替えのサポートや臨時託児ロビーでお世話をすることで、未就学児を持つパパやママが公衆浴場を利用しやすい環境づくりを構築。たまには、ゆっくりお風呂に入ってもらふ事を目的としたサービスである。また復興入浴支援として和倉温泉総湯や能登半島いこいの村を会場とした「出張パパママ銭湯」も引き続き能登方面で開催し、能登半島地震で壊滅的な影響を受けた和倉温泉の復興も兼ねて、憩いの場となる総湯での無料入浴支援ボランティア活動を実施した。

【2025年度開催実績】

- 5/17(土) 金沢温泉金石荘(10組)
- 7/12(土) 諸江の湯(10組)
- 9/20(土) れもん湯(10組)
- 10/5(土) 金沢温泉金石荘(10組)
- 3/15(土) 出張特別企画！和倉温泉総湯(30組)



活動内容②「ボディウォッシュタオル開発」

金沢市内の銭湯を盛り上げる取り組みとして、金沢星稜大学女子短期大学部(以下、星短)経営実務科の学生が、ボディウォッシュタオルの製作に取り組んだ。この企画は、「経営実務Ⅱ(担当：辰巳佳彦助教)」の一環として行われたものであり、地域の銭湯と学生が連携する実践的なプロジェクトである。



授業では、銭湯協会から「若者にも銭湯で使ってもらえるノベルティを開発してほしい」という依頼があったという想定のもと、学生たちが企画立案からプレゼンテーション、製作工程までを経験した。ボディウォッシュタオルは全240枚。デザインは三種類あり、学生達は、「白いタオルに印刷するため色使

いに制限があり、その中で銭湯と星短それぞれの魅力をどう表現するかが難しかった」と振り返り、この企画に、「年配の人が多い場所」という銭湯のイメージを変えたいという思いを込めた。

完成したボディウォッシュタオルは、公衆浴場生活衛生同業組合金沢支部へ贈呈され、その後、子ども向けのスタンプラリーなどの企画に活用されている。授業という枠を超え、地域と学生が協力して形にした今回の取り組みは、銭湯と学生双方の魅力を伝えるものとなった。

活動内容③「かなざわおふろ旅新聞 第4刊」

今年度は金沢星稜大学の神崎ゼミナールの3年次が地域との連携を重視しながら、金沢の銭湯の魅力を発信する新聞を制作した。ゼミ生達は「共創インターンシップ」に参加し、「pocapoca 御経塚の湯」と連携して銭湯を盛り上げる方法を検討した。活動の過程で松永社長から「一つの銭湯だけでなく、地域全体を盛り上げることが重要である」という考えを伺い、この学びを踏まえ、複数の銭湯の魅力をまとめて伝えることができる新聞製作を担った。本活動を通して、銭湯は身体を温める場にとどまらず、地域にとって重要な役割を担う存在であることを理解し、学生間で金沢市内13カ所の銭湯を巡った。

成果、結果の考察

若者が公衆浴場の活性化に寄り添うという視点から、非常に成果や実りのある年度になったと考える。金沢星稜大学の学生が全面的に入浴支援や新たな素材となる商品開発に挑戦し、それらを発信する新聞の執筆にも取り組むことができた。若い世代がこれまで見たことのない景色や分野に飛び込むことは非常に新鮮であり、行き慣れているスーパー銭湯や健康ランドとは全く違う公衆浴場の環境と造りに目を輝かせていたのが印象的であった。

今後の課題、展望

今後は金沢市内の銭湯に留まらず、石川県内の銭湯へ視野を広げ、県内全体の活性化に繋がるような媒体の制作、発信を目指して新たな取り組みを計画するつもりである。新聞の第5号発刊、石川県銭湯図鑑制作なども予定している。また引き続き若者世代でさまざまな企画を公衆浴場組合とタイアップして繰り広げ、銭湯が憩いの場として、そしてゆっくりくつろげる場所としても人々の暮らしの一助となるような活動を続けたい。

